

平成 25 年度「世界エイズデー」キャンペーンテーマ・フォーラム報告（第 1 回）
「一緒にテーマを考えよう」

2013 年 5 月 24 日（金）18:30～20:00 コミュニティセンター akta 出席者 20 名

- 開会あいさつ、趣旨説明（公益財団法人エイズ予防財団 宮田一雄理事）
 - ・議論の参考に HIV/エイズ分野でこの 1 年ほどに起きた出来事を 11 項目ピックアップした（資料 1）
 - ・平成 24（2012）年エイズ発生動向について（厚生労働省エイズ動向委員会報告）
 - ・フォーラムでは、現場の課題やキャンペーンの方向性を見定め、今年はどんなメッセージを伝えていくのかを議論してほしい。東京・大阪の 2 回のフォーラムで出された意見と API-Net に寄せられた意見を集約し、7 月のテーマ検討会議で候補案を策定してエイズ予防財団から厚生労働省に提出する。自分たちの意見が国のエイズ政策のメッセージに反映されるよう活発な議論をお願いしたい。また、このテーマ策定のプロセス自体がキャンペーンの一翼を担えるようにしていきたい。
 - ・API-Net での意見募集について
 - ・過去 3 年間のテーマ紹介

ディスカッション

- 司会・進行（特定非営利活動法人日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラス 長谷川博史代表）

フォーラムはエイズ対策で何がいま問題で何を解決すべきなのか、それを議論する場としたい。おそらく共通認識された課題がキャンペーンテーマとなり、いろいろな場面で展開されるだろう。本日は様々な立場の方がご出席していると思う。現在ご自身の周りで何が問題になっているのか、テーマとして取り上げたい問題は何かなど、感じていることを自由に話していただきたい。ブレインストーミングの場なので、他者の意見を批判したり否定したりすることのないようご協力願いたい。

- 参加者からは以下のような意見が出された。

【現場で感じる問題】

《関心の薄れ》

- ・コミュニティベースで普段感じるのは、若い世代にエイズのリアルティが伝わっていないこと。自分たちの世代はエイズパニックとか、エイズは怖い等のイメージが強くあり過ぎた。逆に若い世代は、HIV に罹っても死ぬ病気ではないという肌感覚があるようだ。動向を見ても、若い世代に HIV 感染が増えているので、それを踏まえて対策を練らなければいけないと思う。
→MSM の人が集まる最先端の現場からの意見だろう。
- ・医療機関においても HIV 診療外来以外は、未だに対応が不十分なところがある。徐々に関心が薄れている。治療が進歩し、陽性者は長期生存が可能となった。高齢になればいろいろなことで医療機関にかかる。困ることなく生活が送れるとよい。
→「関心の薄れ」は 1 つのキーワードだ。
- ・店頭でエイズキャンペーンを行っているが、国内のエイズ問題への関心の薄れを感じる。寄付を募るのでも、日本の若者の教育や予防啓発に役立けると言うピンとこないが、南アフリカのエイズ孤児への支援だと反応する傾向が強まっている。企業としてキャンペーンがやり辛くなっている。
→エイズを自分たちの問題としてではなく海外の問題として捉える傾向は以前から課題にあがって

いた。平成 23 年度のテーマ「エイズとわたし」は、まさにそれを意識したテーマだ。

- ・研修会は募集開始後 2 週間程度で定員の 90 名に達した。自治体の方は参加に熱心だ。電話相談では感染者だけでなく、周囲の家族・パートナー・友人・同僚等の相談が増え、周囲の人の孤立傾向が見える。関心を持ち続ける層はあるが、自発的に活動しようという層は減った印象。街頭キャンペーンのボランティア募集でも学生サークルの元気がなく、裾野が狭くなっているのではないか。
→電話相談の周辺あるいは直接関わってきた人たちの問題は、現実的に深く広がっているのではないか。当事者性を持った人と一般の意識のギャップが広がっているとも認識できる。
- ・エイズというコンテンツが一般向けではなくなっている印象がある。関心の薄れだけではない。HIV / エイズの治療の進歩で死なない病気となったという理解が進めば進むほど、寄附を行う必然性が感じられなくなることは想像できる。例えば、日本の HIV 陽性者はアフリカのエイズ孤児ほどかわいそうな状況ではないと思う。キャンペーンはこうした点も意識して進めなければならない。
→一般的な関心は薄れている。
- ・動向委員会報告で静注薬物による感染が増加しているのが気になる。また、東京ではエイズを発症して初めて HIV 感染が分かる人の数が減少する傾向にあったが、去年は微増に転じている点も気になる。そのことと町のリアリティ、日本全体のリアリティとでギャップを感じる。MSM の感染は 1980 年以降に生まれた人たちが大きなカーブ（増加傾向）を描いているので、対応が必要だと感じている。国際エイズ会議に参加すると、一般層へのメッセージと対象層をしぼった効果的なメッセージをどう使い分けているかが他の国でも課題になっていることを実感する。
→どの層に向けたキャンペーンテーマなのか。エイズの問題は、1つのキーワードですべての立場の人が共有できる状況ではなくなってきたのだろう。
→意見は立場によっても異なる。例えば、HIV/エイズの活動を続けている人や当事者は深く掘り下げたテーマを望むだろう。そうすると行政や企業は、具体的な施策を作りにくくなるはずだ。
- ・行政の立場からみると全体的に認知度が落ちて、理解を得るのが難しいという印象を受ける。個別施策層への取り組みが大切だと感じる一方で、一般にも広く知ってもらう必要があると感じる。
→「理解」、「基礎知識」とは何なのか。実はいろいろな受け止め方があるだろう。
- ・国内がエイズに無関心になってきた時期に、啓発キャンペーンを始め、以後ずっと続けてきた。若い世代が行きやすいお店で、しかもスタッフは顧客と同世代。スタッフが話をする中でエイズについてお客様に知ってもらうきっかけが作れるという観点から続けてきた。国内の状況は変化しているが、社内ではずっと統一したテーマで取り組んでいる。テーマを掲げながらどんなパートナーと協力し、どのようなポイントを伝えていくのか、担当者として苦勞している点である。
→取り組み続けている数少ない企業の 1つ。スタッフの意識はどうか。
→店頭での実践の他に、NGO のピアエデュケーション等に参加すると、より自分の問題として捉えられ、理解の度合いが高まっているように思う。
- ・この 25 年を振り返ると、HIV/エイズに対し恐怖や不安のメッセージを訴えることがなくなってきている。この点は重視したい。
→関心は低いですが、エイズについて触れるような何らかの機会があると逆に情報を求めてくる傾向がある。電話相談や研修受講などをみると、そのギャップが端から端に動くこともある。
- ・同じ陽性者でも予防啓発については考え方にばらつきがあるし、どう参加すればよいか分からないこともある。エイズを発症したか否かでも考え方は異なる。いろいろな人のお蔭で HIV に感染しても普通に生きていける時代になった。だが、逆に HIV に対する恐怖感が失せ、それが予防啓発の足かせになる部分もある。当事者の立場からは HIV の感染がエイズ発症前に分かることが大切だと伝えたい。
→恐怖感を強調すると陽性者がはじきだされてしまう。恐怖ではない予防展開について聞きたい。
- ・メッセージの出しかたのバランスを取るのが難しい。常に悩み悩み行ってきた。出しかたによっては、怖くないからだいじょうぶと捉えられる。では、事実をどう伝えるのか。1つには、きちんと

最新の情報を提示する。もう1つは、陽性者の体験手記を第三者が録音して、一人一人のリアリティを訴えていく。後者のプログラムは手ごたえがある。
→かわいそうな存在としてアピールするのは、ある意味、恐怖の裏返しだと思う。関心と恐怖とのギャップをどう埋めるのか。

- ・議論開始後30分が経過するのに、一言もセックスという言葉が出ていない。HIV/エイズはセックスの問題なのに、それに触れられていない。問題はそのことに尽きる。講演会等で医療や差別の問題を扱くと、支援の対象として参考になったという意見が出る。一方、恋愛やセックスを扱くと、私的な個人の部分につながり、誰しも関係があるという意見につながる。関心の低さのしわ寄せは若者にくる。キャンペーンとしては若者に力を入れたいと思う。
→セックスがキーワードになると共有し辛くなるという指摘があった。行政はまだ可能だと思うが、キャンペーンとして広がりを持たせる必要があるので企業には難しい。ただし、セックスということばを直接入れるかどうかは別として、ここから目をそらせるとテーマが効果を失う可能性がある。
- ・これまでエイズを身近に感じたことはなかったが、この数カ月でより身近にリアルに感じるようになった。友人や家族に話すと、関心がないわけではないが、リアリティを持っていない。医療の進歩で死なない病気になったと楽観している人もいる。自分の家族や友人が感染したら、反応は異なるのではないかと。そもそもエイズという病気は何なのかと調べたり、自分に何ができるのか考えたりするのはではないか。セックスによる感染が多いのは誰しも理解している。ことばとして発信するのは難しいが、上手く入れられるとメッセージ性は強くなるのではないかと感じた。
- ・2月頃、ある記者が世界のエイズの状況を記事で書き、それがSNSのニュースのアクセスランキングで1位になった。エイズに関心がないわけではなく、掘り起こしかたやメッセージの出しかたにあるのではないかと。
→キャンペーンとしてどちらの方向でいけばよいのか。すべての人にふわっと伝えようとする意識化は難しい。より引き寄せた形で伝えられないか。テーマ決定後にキャンペーンとしてどう展開していくのか。それも課題だ。テーマをどう生かすかを念頭に置きながら、何をどこに向けて伝えるのかを考えていきたい。

《テーマの方向性について》

- ・HIV陽性者やHIV/エイズを身近に感じている人にメッセージが届いていないのなら改善すべきだし、関心はあるがどうしてよいか分からない人にも伝わるようにしたい。
→セックスの問題に若い層が関心を持つのだとすれば、逆に情報発信する側が、この点を避けていたのかもしれない。テーマに直接、セックスということばを入れるという意味ではないが、セックスと向き合わないことで関心を呼び起こせなかった可能性はある。
- ・高校は健康教育の中で性感染症を取り上げているので、HIV感染症はもはや致命的な病ではないという程度の知識をもっている生徒はいる。中学生はまだまだだ。ハイリスクアプローチとポピュレーションアプローチが噛み合わないとなんとも上手く広まらないと思う。
→エイズ対策では、population approach（広く一般を対象とした予防活動）とtargeted approach（対象を絞った予防活動：MSM、性産業従事者とその顧客、若者、外国人、薬物使用者等）は常に課題である。一般施策と個別施策の両方が噛み合っていないといけなく、バラバラでは意味がない、というのがこれまでの常識だった。今日の議論の中で、一般施策ではセックスを扱えず意識改革が出来なかったという指摘があった。施策の中でセックスとどう向き合うかは1つの課題ではないか。
- ・国内では明らかに男性同性間での感染が広がっている。1980年以降に生まれた人たちの感染はおそらくまだ止まっていない。30歳代はある程度、横ばいの傾向が見える。20代あるいはこれからセックスが活発になる10代の若者にフォーカスをして、知ってほしいことをどう伝えるかが大事だ。
→若い層にフォーカスすることが重要ではないかということが議論されてきた。MSMは非常に重要なのだが、ポピュレーションアプローチでは外れがちだ。対象に合わせて表現していけるような展

開が可能なものを考えておくべきではないか。

- ・自分が働いている企業はグローバルなので、セックスということばが絶対にNGというわけではない。日本の企業の場合はどうなのか。グローバル企業とはいえ、ローカルな市場で役立つことは使命の1つであり、アフリカの支援だけしていればいいというわけにはいかないのだが、一方で自分のことではなく他人のほうに関心や共感をもたれやすい現実もある。例えば、アフリカ支援では教育や予防に力を入れ、そこから自分たちの問題につなげていくといったフックができるといい。→海外青年協力隊や国際関係のインターンなどを経験し、プログラム終了後に日本で動き出す人がいる。きっかけは上手く使うべきだ。
- ・グローバル企業の依頼で HIV/エイズの研修を実施した。日本法人ではなく、海外の本社から日本国内の研修を依頼された。1994年の第10回国際エイズ会議（横浜）で多額な寄附を行い、人的な貢献もしていた企業だが、現在の社員はそれを知らない人が多い。研修では女性社員が多く、こどもに HIV 感染あるいは性感染症の心配があった場合に、どうコミュニケーションをとったらよいかという点に関心を持っていた。企業の同僚に HIV 陽性者がいたらどう対応するかを中心にした研修だったが、家族が HIV に感染した場合はどう支援したらよいかという点が一番多く質問された。→自分の問題だけでなく、家族も重要だ。陽性者の周辺の人への支援は手薄であり、その対策として、当事者の語りだけでなく、家族や友人の手記も読みあげている。企業も顧客というレベルで考えると対象は一般国民になるが、従業員と考えると変わってくる。キャンペーンの展開にも多様なメニューが提示できる。企業も社会貢献（CSR）の一環というだけでなく、自分たちの問題として個々に関わってくれることがある。

《昨年度のテーマ「“AIDS” GOES ON... ～エイズは続いている～」について》

- ・昨年度のテーマを使用したか否か、どのように使用したか、使用しなかった理由は何かを聞きたい。
- ・東京都では作成物などでかなり頻繁に使用した。意味がしっくりきたので活用しやすかった。
- ・テーマ検討の場面では、良いテーマだと思っていた。頭の中には常にこのテーマがあった。ゲイコミュニティでは使わず、そこではセックスをメインにしたテーマを使っていた。より届けたい人に届けるには、ターゲットを絞っていかないといけないからだ。
- ・実際に使われていたイメージはないが、近年のテーマの中で自分たちに一番しっくりするテーマだった。
- ・ずっと活動してきた人からすれば、これだよねと合言葉になったと思う。但しこれを使って展開するのはなかなか難しいのだろう。自治体からは評判が良かったと思う。
- ・新聞や週刊誌は縦書きなのでテーマに英語が入ると使いづらくなる。個人的には分かりやすく良いテーマだと思う。
 - テーマ設定は良かったが、それをどう展開するかが残された課題なのだと思う。
 - テーマの意見公募を API-Net で行っているのだから、応募していただきたい。
 - テーマ決定後は、なぜこのテーマに決まったのかを API-Net に出してほしい。

■閉会のあいさつ（公益財団法人エイズ予防財団 宮田一雄理事）

本日はいろいろな議論ができ、非常に参考になった。

API-Net で意見募集をしている。本日のご意見と重なっても構わないので、応募していただきたい。

世界では、エイズは終わりの始まりというようなことがいわれているが、日本のテーマ「“AIDS” GOES ON... ～エイズは続いている～」の方が現状をとらえているとピーター・ピオット氏（元国連合同エイズ計画事務局長）も語っていた。そうだよねと多くから賛同してもらえたテーマだったと思うが、課題は、「だから」の部分であろう。だから、どうするのか。今年はそこに展開できると思う。その意味で例えば、上手くセックスに踏み込んでいけるようなテーマが設定できるのかどうか。引き続き皆様のご意見をよろしくお願ひしたい。